

# 七宝の柱

泉鏡花

青空文庫



山吹<sup>やまぶき</sup>つつじが盛<sup>さ</sup>だのに、その日の寒<sup>くる</sup>さは、俵<sup>わた</sup>の上で幾度も外套<sup>そで</sup>の袖<sup>そで</sup>をひしひしと引<sup>ひき</sup>合<sup>あ</sup>せた。

夏<sup>なつ</sup>草<sup>くさ</sup>やつわものどもが、という芭蕉<sup>ばしょう</sup>の碑<sup>いし</sup>が古塚<sup>ふるづか</sup>の上に立って、そのうしろに藤<sup>ふじ</sup>原<sup>はら</sup>氏<sup>し</sup>三代栄華<sup>えいげ</sup>の時<sup>とき</sup>、竜頭<sup>りゅうず</sup>の船<sup>ふね</sup>を泛<sup>うか</sup>べ、管絃<sup>かんげん</sup>の袖<sup>そで</sup>を翻<sup>ひるがえ</sup>し、みめよき女<sup>くれない</sup>たちが紅<sup>くれない</sup>の袴<sup>はかま</sup>で渡<sup>わ</sup>つた、朱欄<sup>しゆらん</sup>干<sup>かん</sup>、瑪瑙<sup>めのう</sup>の橋<sup>はし</sup>のなごりだと言う、蒼々<sup>あおあお</sup>と淀<sup>よど</sup>んだ水<sup>みづ</sup>の中に、馬<sup>うま</sup>の首<sup>くび</sup>ばかり浮<sup>う</sup>いたような、青黒<sup>くろ</sup>く朽<sup>く</sup>古<sup>こ</sup>びた杭<sup>くい</sup>が唯<sup>ただ</sup>一つ、太<sup>ふ</sup>く頭<sup>く</sup>を出<sup>で</sup>して、そのまわりに何<sup>なん</sup>の魚<sup>うお</sup>の影<sup>かげ</sup>もなしに、幽<sup>かすか</sup>な波<sup>なみ</sup>が寂<sup>さび</sup>しく巻<sup>ま</sup>く。――雲<sup>うみ</sup>に薄暗<sup>はくあん</sup>い大池<sup>おおいけ</sup>がある。

池<sup>いけ</sup>がある、この毛越寺<sup>もうえつじ</sup>へ詣<sup>もつ</sup>でた時も、本堂<sup>ほんだう</sup>わきの事務所<sup>しむしょ</sup>と言<sup>い</sup>つた処<sup>ところ</sup>に、小机<sup>ここし</sup>を囲<sup>かこ</sup>んで、僧<sup>そう</sup>とは見えない、鼠<sup>ねず</sup>だの、茶<sup>ち</sup>だの、無地<sup>むち</sup>の袴<sup>はかま</sup>はいた、閑<sup>ひま</sup>らしいのが三人控<sup>さんにんこう</sup>えたのを見ると、その中に火鉢<sup>かひ</sup>はないか、赫<sup>かつ</sup>と火<sup>か</sup>の氣<sup>き</sup>の立<sup>た</sup>つ……とそう思<sup>おも</sup>つて差覗<sup>さしのぞ</sup>いたほどであつた。

旅<sup>りょ</sup>のあわれを、お察<sup>さつ</sup>しあれ。……五月<sup>ごがつ</sup>の中旬<sup>なかつば</sup>と言<sup>い</sup>うのに、いや、どうも寒<sup>さむ</sup>かつた。

あとで聞<sup>き</sup>くと、東京<sup>とうきょう</sup>でも拾<sup>あわせ</sup>一枚<sup>まい</sup>ではふるえるほどだつたと言<sup>い</sup>う。

汽車<sup>きしや</sup>中<sup>ちゆう</sup>、伊達<sup>だて</sup>の大木戸<sup>おおくど</sup>あたりは、真夜中<sup>まよなちゆう</sup>のどしや降<sup>ふり</sup>で、この様子<sup>ようす</sup>では、思<sup>おも</sup>立<sup>いた</sup>つた光<sup>ひ</sup>かりどう

堂<sup>どう</sup>の見物<sup>けんぶつ</sup>がどうなるだろうと、心細<sup>こころこま</sup>いまできづかわれた。

濃い靄もやが、重かさなり重かさなり、汽車と諸もろともに駈かけりながら、その百鬼夜行ひやくきやこうの、ふわふわと明けゆく空に、消きえぎわ際らしい顔で、硝子窓がらすを覗のぞいて、

「もう!」

と笑つて、一つ一つ、山、森、岩の形を頭あちわす頃から、音もせず、霧雨になつて、遠おちこ近ちに、まばらな田舎家いなかやの軒とともに煙りつつ、仙台に着いた時分に雨はあがつた。

次第に、麦も、田も色には出たが、菜種なたねの花も雨にたたかれ、畠はたけに、畝あぜに、ひよろひよろと乱れて、女郎花おみなえしの露を思わせるばかり。初夏はおろか、春の闌たけなわな景色とさえ思われ  
ない。

ああ、雲が切れた、明あかるいと思ふ処は、

「沼だ、ああ、太おおきな沼だ。」

と見る。……雨水が渺びようびよう々として田を浸ひたすので、行く行く山の陰は陰惨として暗い。  
……処々ところどころい巖蒼く、ぽつと薄紅うすあかく草が染まる。嬉うれしや日が当ると思えば、角つのぐむ蘆あしに  
交まじり、生おいしげ茂る根笹ねざさを分けて、さびしく石楠花しやくなげが咲くのであつた。

奥の道は、いよいよ深きにつけて、空は弥いが上に曇つた。けれども、志こころざす平泉ひらいずみに着いた時は、幸いに雨はなかつた。

そのかわり、俤くるまに寒い風が添ったのである。

——さて、毛越寺では、運慶うんけいの作と称となる仁王尊におうそんをはじめ、数ある国宝を巡覽せしめる。

「御参詣の方にな、お触さわらせ申しはいたさんのじやが、御信心かに見受けますので、差支えませぬ。手に取つて御覽なさい、さ、さ。」

と腰袴こしばかまで、細いしな竹の鞭むちを手にした案内者の老人が、硝子蓋がらすぶたを開けて、半ば繰くりひらいてある、玉軸金泥ぎよくじくこんでいの経を一卷、手渡しして見せてくれた。

その紺地こんじに、清く、さらさらと装もりあが上あがった、一行金字いちぎようきんじ、一行銀書いちぎようぎんしよの経である。

俗に銀線に触るるなどと言うのは、こうした心持こころもちかも知れない。尊たつとい文字は、掌てに一字かずずつ幽かすかに響ひびいた。私は一拝いつぱいした。

「清衡朝臣きよひらあそんの奉供ぶぐ、一切経いっさいきようのうちであります——時価で申しますとな、唯ただこの一卷でも一万円以上であります。」

橘南谿たちばなんけいの東遊記とうゆうきに、

これは清衡存生きよひらぞんじようの時、自在坊蓮光じざいぼうれんこうといへる僧に命じ、一切経書写の事つかぎとを司つかさどらしむ。三千日が間、能書のうしよの僧数百人を招請しょうせいし、供養し、これを書写せしめし

となり。余もこの経を拝見せしに、その書体楷法正しく、行法また精妙にして

と言ふもの即これである。

ちよつと（この寺のではない）或案内者に申すべき事がある。君が提げて持った鞭だ。が、遠くの掛軸を指し、高い処の仏体を示すのは、とにかく、目前に近々と拝まるる、観音勢至の金像を説明すると言つて、御目、眉の前へ、今にも触れそうに、ビシャビシャと竹の尖を振うのは勿体ない。大慈大悲の仏たちである。大して御立腹もあるまいけれども、作がいいだけに、瞬もしたまいそうで、さぞお鬱陶しかろうと思う。

俤は寂然とした夏草塚の傍に、小さく見えて待つていた。まだ葉ばかりの菖蒲杜若が隈々に自然と伸びて、荒れたこの広い境内は、宛然沼の乾いたのに似ていた。

別に門らしいものもない。

此処から中尊寺へ行く道は、参詣の順をよくするために、新たに開いた道だそうで、傾いた茅の屋根にも、路傍の地藏尊にも、一々由緒のあるのを、車夫に聞きながら、金鷄山の頂、柳の館あとを左右に見つつ、俤は三代の豪奢の亡びたる、草の徑を静に進む。

山吹がいまを<sup>さかり</sup>壮に咲いていた。丈<sup>たけたか</sup>高く伸びたのは、車の上から、花にも葉にも手が届く。——何<sup>どこ</sup>処か邸<sup>やしき</sup>の垣<sup>かき</sup>根<sup>こ</sup>越<sup>こし</sup>に、それも偶<sup>たま</sup>に見るばかりで、我ら東京に住むものは、通りがかりにこの金衣<sup>きんい</sup>の娘<sup>じよう</sup>々<sup>じよう</sup>を見る事は珍しいと言つても可<sup>よ</sup>い。田舎<sup>ほかとち</sup>の他土地<sup>ほかとち</sup>とても、人家<sup>にや</sup>の庭<sup>てい</sup>、背戸<sup>せど</sup>なら格別<sup>かくべつ</sup>、さあ、手折<sup>たお</sup>つても抱いてもいいよ、とこ<sup>のなか</sup>う野中<sup>のなか</sup>の、しかも路<sup>みち</sup>の傍<sup>はた</sup>に、自由に咲いたのは殆ど見た事がない。

そこへ、つつじの赤いのが、ぽーとなつて咲<sup>さ</sup>交<sup>まじ</sup>る。……

が、燃<sup>も</sup>立<sup>えた</sup>つようなのは一株も見えぬ。霜<sup>しも</sup>に、雪に、長く鎖<sup>とぎ</sup>された上に、風の荒ぶる野に開<sup>せ</sup>く所<sup>い</sup>為<sup>い</sup>であらう、花卉<sup>けい</sup>が皆堅い。山吹は黄なる貝を刻んだようで、つつじの薄<sup>うす</sup>紅<sup>くれな</sup>は珊瑚<sup>さんご</sup>に似ていた。

音のない水が、細く、その葉の下、草の中を流れている。それが、潺<sup>せん</sup>々<sup>せん</sup>として巖<sup>いわ</sup>に咽<sup>むせ</sup>んで泣<sup>な</sup>く谿<sup>たに</sup>河<sup>がわ</sup>よりも寂<sup>さみ</sup>しかった。

実際、この道では、自分たちのほか、人らしいものの影も見なかったのである。

そのかわり、牛が三頭<sup>さんとう</sup>、犢<sup>こうし</sup>を一頭<sup>ひとつ</sup>連れて、雌<sup>めす</sup>雄<sup>おす</sup>の、どれもずずん<sup>おおき</sup>と大きく真黒なのが、前途<sup>ゆくて</sup>の細道<sup>せみち</sup>を巴<sup>ともえ</sup>形<sup>がた</sup>に塞<sup>ふさ</sup>いで、悠々と遊んでいた、渦が巻くようである。

これにはたじろいだ。

「牛飼<sup>うしかい</sup>も何もいない。野放しだが大丈夫かい。……彼奴<sup>あいつ</sup>猛獣だからね。」

「何ともしやあしましねえ。こちらら馴染<sup>なじみ</sup>だで。」

けれども、胸が細くなつた。轆棒<sup>かじ</sup>で、あの大きい巻斑<sup>まきふ</sup>のある角<sup>つの</sup>を分けたのであるから。

「やあ、汝<sup>われ</sup>、……小僧<sup>たう</sup>も達しやがな。あい、御免。」

敢て獣<sup>あえけもの</sup>の臭<sup>におい</sup>さえもしないで、縦の目で優しく視<sup>み</sup>ると、両方へ黒いハート形の面<sup>おもて</sup>を分けた。

が牝牛<sup>めうし</sup>の如きは、何だか極りでも悪かつたように、さらさらと雨のあとの露<sup>ちら</sup>を散して、山吹の中へ角を隠す。

私はそれでも足を縮めた。

「ああ、漸<sup>やつ</sup>と衣<sup>ころも</sup>の関<sup>せき</sup>を通つたよ。」

全く、ほつとしたくらいである。振向いて見る勇氣もなかった。

小家<sup>こいえ</sup>がちよつと両側に續いて、うんどん、お煮染<sup>にしめ</sup>、御酒<sup>おんさけ</sup>などの店もあつた。が、何処<sup>どこ</sup>

へも休まないで、車<sup>わかいしゆ</sup>夫<sup>ふ</sup>は坂の下で俵<sup>くるま</sup>をおろした。

軒端<sup>のきば</sup>に草の茂つた、その裡<sup>なか</sup>に、古道具をぐつぐつと積んだ、暗い中に、赤絵<sup>あかえ</sup>の茶碗、皿の交つた形は、大木の空洞<sup>うつつろ</sup>に茨<sup>いばら</sup>の実の溢<sup>こぼ</sup>れたような風情<sup>ふぜい</sup>のある、小さな店を指して、

「あの裏に、旦那、弁慶<sup>べんけい</sup>手植<sup>てうえ</sup>の松があるで——御覧になるかな。」

「いや、帰途にしましょう。」

その手植の松より、直接に弁慶にお目に掛った。

樹立の森々として、聊かもの凄いだ坂道——岩膚を踏むようで、泥濘はしない

がつるつると通る。雨降りの中では草鞋か靴でもないとな下は難しからう——其処を

通抜けて、北上川、衣河、名にしよう、高館の址を望む、三方見晴しの処（こ

こに四阿が立つて、椅子の類、木の株などが三つばかり備えてある。）其処へ出ると、

真先に案内するのが弁慶堂である。

車夫が、笠を脱いで手に提げながら、裏道を崖下りに駈出して行つた。が、待つ

と、間もなく肩に置手拭をした円鬘の女が、堂の中から、扉を開いた。

「運慶の作でござります。」

と、ちよんと坐つて言う。誰でも構わん。この六尺等身と称うる木像はよく出来てい

る。山車や、芝居で見るとは訳が違ふ。

顔の色が蒼白い。大きな折烏帽子が、妙に小さく見えるほど、頭も顔も大の悪僧の、鼻

が扁く、口が、例の喰しばった可恐しい、への字形でなく、唇を下から上へ、への字を反

対に掬つて、

「むふッ。」

ニタリと、しかし、こう、何か苦笑にがわらいをしていそう、目も細く、目皺めじわが優しい。出お額ででまたこう、しやくうように人を視みた工合あつちが、これで魂たましいが入ると、麓ふもとの茶店へ下りて行つて、少女こおんなの肩おほきを大な手で、

「どうだ。」

と遣やりそう、串じょうだん戲ぎものの好々爺こうこうやの風がある。が、齒はが抜けたらしく、豊ゆたかな肉の頬ほのあたりにげつそりと窠やつれの見えるのが、判官ほうがんに生命いのちを捧げた、苦勞のほどが腮しほばれて、何となく涙ぐまるる。

で、本文ほんもん通り、黒革くろかわ緘おどしの大おお鎧よろい、樹蔭こかげに沈んだ色ながら鎧よろいの袖そでは颯さつ爽そうとして、長刀ながなたを軽くついて、少し屈こじみかかった広い胸むねに、兵えいの柄えのしなうような、智ちと勇ゆうとが満ちて見える。かつ柄も長くない、頬ほ先さきに内側うちがはにむけた刃やいばも細い。が、かえって無比の精銳せいゑいを思わせて、颯さつと掉ふると、従したがつて冷い風が吹きそうである。

別に、仏菩薩ぶつぼさつの、尊とうい古像こざうが架かに据かかえて数々ある。

みどり児ごを、片袖かたそでで胸むねに抱いだいて、御顔おんかおを少し仰向あおむけに、吉祥果きつしょうかの枝えを肩かたに振掛ふりかけ、裳もすそをひらりと、片足を軽く挙げて、——いいぐさは拙つたいが、舞まいなどしたまう状さまに、たとえ

ば踊りながらでんでん太鼓で、児をおあやしのような、鬼子母神の像があつた。御面は天女に齊しい。彩色はない。八寸ばかりのほのぐらい、が活けるが如き木彫である。

「戸を開けて拝んでは悪いんでしょうか。」

置手拭のが、

「はあ、其処は開けません事になつております。けれども戸棚でございますから。」

「少々ばかり、御免下さい。」

と、網の目の細い戸を、一、二寸開けたと思うと、がっちりと支えたのは、亀井六郎が所持と札を打つた筈であつた。

三十三枚の櫛、唐の鏡、五尺のかつら、紅の袴、重の衣も納めつと聞く。……よし、それはこの筈にてはあらずとも。

「ああ、これは、疵をつけてはなりません。」

棚が狭いので支えたのである。

そのまま、鬼子母神を礼して、ソツと戸を閉てた。

連の家内が、

「粹な御像ですわね。」

と、ともに拝んで言った。

「失礼な事を、——時に、御案内料は。」

「へい、五錢。」

「では——あとはどうぞお賽錢に。」

そこで、鎧着よろぎたたのもししい山法師に別れて出た。

山道、二町ばかり、中尊寺はもう近い。

おおき

大な広い本堂に、一体見上げるような釈尊しやくそんのほか、寂寞せきばくとして何も無い。それが

莊嚴であつた。日の光が幽かすかに漏れた。

裏門の方へ出ようとすると傍に、寺の廚くりやがあつて、其処で巡覽券を出すのを、車夫わかいしゆが

取次いでくれる。巡覽すべきは、はじめ薬師堂、次の宝物庫ほうもつこ、さて金色堂こんじきどう、いわゆ

る光堂ひかりどう。続いて経藏きようぞう、弁財天べんざいてんと言う順序である。

皆、参詣の人を待つて、はじめて扉を開く、すぐまたあとを鎖とぎすのである。が、宝物

庫ぐらには番人がいて、経藏には、年紀としわかの少い出家が、火の気もなしに一人経机きようづくえに對つ

ていた。

はじめ、薬師堂に詣でて、それから宝物庫ほうもつぐらを一巡すると、ここの番人のお小僧が鍵を手

にして、<sup>ひとすじ</sup>一条、道を隔てた丘の上に導く。……<sup>きざし</sup>階の前に、<sup>やえぎくら</sup>八重桜が枝も<sup>たわわ</sup>撓に咲きつつ、かつ芝生に散つて敷いたようであつた。

桜は中尊寺の門内にも咲いていた。<sup>ふもと</sup>麓から上ろうとする坂の下<sup>とつつき</sup>の取着の処にも<sup>ひともと</sup>一本見事なのがあつて、<sup>さんちゅうこうろえ</sup>山中心<sup>じようじよう</sup>得の条々を記した<sup>きんさつ</sup>禁札と一<sup>いっしょ</sup>所に、たしか「<sup>あさぎぞ</sup>浅葱桜」という札が建つていた。けれども、その<sup>ところどころ</sup>のみに限らない。処々<sup>ところどころ</sup>汽車の窓から<sup>み</sup>視た桜は、奥が暗くなるに従つて、ぱつと<sup>さえ</sup>冴を見せて咲いたのはなかつた。<sup>うすすみ</sup>薄墨、<sup>うこん</sup>鬱金、またその<sup>あさぎ</sup>浅葱と言つたような、どの桜も、皆ぱつとりとして曇つて、暗い紫を帯びていた。雲が黒かつたためかも知れない。

唯、<sup>ときざし</sup>階の<sup>はなびら</sup>前の花片が、折からの冷い風に、はらはらと<sup>さそ</sup>誘われて、さつと散つて、この<sup>とら</sup>光堂の中を、<sup>そら</sup>空ざまに、ひらりと紫に舞うかと思うと——<sup>はめ</sup>羽目に<sup>うきぼり</sup>浮彫した、<sup>くじやく</sup>孔雀の尾に玉を刻んで、<sup>ろくしやう</sup>緑青に<sup>さ</sup>錆びたのがな<sup>おごそか</sup>お厳に美しい、その翼を——ぱらぱらとたたいて、ちらちらと床にこぼれかかる……と宙で、<sup>きん</sup>黄金の<sup>まきばしら</sup>巻柱の光をうけて、ぱつと<sup>こんじき</sup>金色に<sup>ひるがえ</sup>ひるがえ<sup>ひるがえ</sup>翻るのを見た時は、<sup>ひとみ</sup>思わず<sup>みは</sup>驚歎の瞳を<sup>みは</sup>睜つた。

<sup>なげし</sup>床も、<sup>もと</sup>承塵も、柱は固より、<sup>たたず</sup>イめるものの<sup>ところ</sup>踏む処は、<sup>こくしつ</sup>黒漆の落ちた<sup>きん</sup>黄金である。<sup>きん</sup>黄金<sup>は</sup>の剥げた<sup>は</sup>黒漆とは思われないで、しかも<sup>さ</sup>些の<sup>さ</sup>けばけしい感じが起らぬ。さながら、<sup>きん</sup>金粉

の薄雲の中に立つた趣がある。われら仙骨を持たない身も、この雲はかつ踏んでも破れぬ。その雲を透して、四方に、七宝莊嚴の巻柱に對するのである。美しき虹を、そのまま柱にして絵かれたる、十二光仏の微妙なる種々相は、一つ一つ錦の糸に白露を鏤めた如く、玲瓏として珠玉の中にあらわれて、清く明かに、しかも幽なる幻である。その、十二光仏の周囲には、玉、螺鈿を、星の流るるが如く輝かして、宝相華、勝曼華が透間もなく咲きめぐっている。

この柱が、須弥壇の四隅にある、まことに天上の柱である。須弥壇は四座あつて、壇上には弥陀、觀音、勢至の三尊、二天、六地藏が安置され、壇の中は、真中に清衡、左に基衡、右に秀衡の棺が納まり、ここに、各一口の剣を抱き、鎮守府將軍の印を帯び、錦袍に包まれた、三つの屍がまだそのままに横わっているそうである。雛芥子の紅は、美人の屍より開いたと聞く。光堂は、ここに三個の英雄が結んだ金色の果なのである。

謹んで、辞して、天界一叢の雲を下りた。

階を下りざまに、見返ると、外圀の天井裏に蜘蛛の巣がかかつて、風に軽く吹かれながら、きらきらと輝くのを、不思議なる塵よ、と見れば、一粒の金粉の落ちて輝く

のであつた。

さて経藏きやうぞうを見よ。また弥いが上に可な懐かしい。

羽目はめには、天女——迦陵頻伽かりようびんがが髣髴ほうふつとして舞いつつ、かなでつつ浮出うきでている。影をうけた束つか、貫ぬきの材は、鈴と草の花の玉の螺鈿らでんである。

漆塗うるしぬり、金の八角はちかくの台座には、本尊、文珠師利もんじゆしり、朱の獅子に騎きしておわします。獅子の眼は爛々まなこらんらんとして、赫かつと真赤な口を開けた、青い毛の部厚な横顔が視みられるが、ずず

ツと足を挙げそうな構えである。右にこの轡くつわを取つて、ちよつと振向いて、菩薩ぼさつにものを

言いそうなのが優ゆうてんぎよく玉、左に一匣いつこうを捧げたのは善哉童子ぜんさいどうじ。この両側左右の背後に、

浄名居士じやうみようちしと、仏陀波利ぶつだはりが一は扠子ほつすを振り、一は錫杖ひとつしやくじやうに一軸いちじくを結んだのを肩にかつぐように杖ついて立つ。額ひたいも、目も、眉も、そのいづれも莞爾莞爾にこにことして、文珠もんじゆも微笑ほほえ

んでまします。第一獅子が笑う、獅子が。

この須弥壇しゆみだんを左に、一架いつかを高く設けて、ここに、紺紙金泥こんしきんでいの一卷を半ば開いて捧げである。見返しは金泥銀泥きんでいぎんでいで、本経ほんきやうの図解を描く。……清麗巧緻せいれいこうちにしてかつ神秘である。

いま此処ここに来てこの経きやうを視みるに、毛越寺の彼はあたかも砂金を捧ぐるが如く、これは月

光を仰ぐようであつた。

架かの裏に、色の青白い、瘦やせた墨染すみぞめの若い出家が一人いたのである。

私の一札に答えて、

「ご緩ゆるり、ご覧なさい。」

二、三の散さん佚いつはあろうが、言うまでもなく、堂の内ない壁へきにめぐらした八やつの棚なぐらに満ちて、二代基もと衡ひらのこの一切いっさい経きよう、一代清きよ衡ひらの金銀きんぎん泥でい一行いっぎよう、まぜ書がきの一切いっさい経きよう、並ならびに判はん官くわん鼈べいの第一人者、三代秀ひで衡ひら老雄の奉納した、黄紙おうし宋板そうばんの一切いっさい経きようが、みな黒耀こくようの珠玉しゆぎよくの如ごとく漆うるしの架かに満ちている。——一切いっさい経きようの全部量は、七駄しちだ片馬かたうまと称なづうるのである。

「——拝見をいたしました。」

「はい。」

と腰こし衣ころもの素足で立つて、すつと、経堂を出て、朴ほ菌おぼの高足駄たかあしだで、巻袖まきそでで、寒さく細ほりそと草くさを行ゆく。清らかな僧であつた。

「弁天堂を案内しますで。」

と車わかいしゆ夫ふが言いつた。

向むかうを、墨染すみぞめで一人行ひとりく若僧にやくそうの姿すがたが、寂さびしく、しかも何となく貴とうとく、正ただに、まき

しく彼処かしこにおわする……天女の御前おんまえへ、われらを導く、つつましく、謙讓なる、一個のお取次のように見えた。

かくてこそ法師たるものの効かいはあろう。

世に、緋、紫、金欄きんらん、緞子どんすを装よそおうて、伽藍がらんに処すること、高家諸侯こうけだいみようの如く、ある

いは仏菩薩の玄関番として、衆俗しゅうぞくを、受附で威張いばつて追払おっぱらうようなのが少くない。

そんなのは、僧侶など、われらと、仏神の中を妨ぐる、姑しゅうとだ、小姑こじゅうとだ、受附だ、

三太夫だ、邪魔ものである。

衆生しゅじょうは、きやつばらを追払おいはらつて、仏にも、祖師にも、天女にも、直接じかにお目にかか

つて話すがいい。

時に、経堂を出た今は、真昼ながら、月光に酔よい、桂かつらの香かに巻かれた心地がして、乱れ

たままの道芝みちしばを行くのが、青く清明なる円まるい床を通るようであった。

階の下に立つて、仰ぐと、典雅温優てんがおんゆうなる弁財天べんさいてんの金字きんじに縁ふちして、牡丹花ぼたんかの額がくがかか

る。……いかにや、年ふる雨露あめつゆに、彩色さいしきのかすかになったのが、木地きじの胡粉ごふんを、かえつ

てゆかしく顕あらわして、萌黄もえぎに群青ぐんじょうの影を添え、葉をかさねて、白緑碧藍はくりよくへきちんの花をい

だく。さながら瑠璃るりの牡丹である。

ふと、高縁たかえんの雨落あま落ちに、同じ花が二、三輪咲いているように見えた。扉がギイ、キリキリと……僧の姿は、うらに隠れつつ、見えずに開く。ぽかんと立ったのが極きまりが悪い。

ああ、もう彼処あそこから透見すきみをなすつた。

とそう思うほど、真白ましろき面影、天女の姿は、すぐ其処そこに見えさせ給う。

私は恥じて俯向うつむいた。

「そのままでお宜よろしい。」

壇は、下駄げたのままだと彼の僧かが言うのである。

なかなか。

足袋たびの、そんなに汚れていないのが、まだしもであった。

蜀紅しよくこうの錦にしきと言う、天蓋てんがいも広くかかつて、真黒まくろき御髪みぐしの宝釵ほうさいの玉一つをも遮さえぎらない。

い、御面影おんおもかげの妙たえなること、御目おんまなざしの美しさ、……申さんは恐おそれ多い。ただ、西の方かた

遙はるかに、山城国やましろのくに、浄瑠璃寺じようるりでら、吉祥天きつしやうてんのお写真に似させ給う。白理はくり、優婉ゆうえん、明めい

麗いなる、お十八、九ばかりの、略人ほぼとだけの坐像である。

ト手について対したが、見上ぐる瞳に、御頬おんほおのあたり、幽かすかに、いまにも莞爾かんじと遊あそばし

そうで、まざまざとは拝めない。

私は、端坐して、いにしえの、通夜つやと言う事の意味を確たしかに知った。

このままに二時ふたときいたら、微妙な、御声おこえが、あの、お口許くちもとの微笑ほほえみから。――

さて壇しりぞを退きざまに、僧のとぎす扉につれて、かしこくもおんなごりさえ惜おしまれまいらすよう、涙ぐましくまた額かを仰いだ。御堂そのまま、私は碧瑠璃へきるりの牡丹花ぼたんかの裡うちに入つて、

また牡丹花の裡から出たようであつた。

花の影が、大な蝶おおきちようのように草に映さした。

月ある、明あきらなる時、花の朧おぼろなる夕ゆうべ、天女が、この縁側えんがわに、ちよつと端居はしいの腰を掛けて

いたまうと、経蔵から、侍士じし、童子どうじ、弘子ほつす、錫杖しゃくじようを左右に、赤い獅子に騎きして、文珠もんじ

師利ゆしりが、悠然と、草をのりながら、

「今晚は――姫君、いかが。」

などと、お話がありそうである。

と、麓ふもとの牛が白象びやくぞうにかわつて、普賢菩薩ふげんぼさつが、あの山吹のあたりを御散歩。

まつたく、一山いっさんの仏たち、大な石地藏いしじぞうも凄すこいように生きていらるる。

下向げこうの時、あらためて、見霽みはらしの四阿あずまやに立つた。

伊勢、亀井、片岡、鷺尾、四天王の松は、畑中、畝の四処に、雲を鎧い、繇糸の風を浴びつつ、或ものは肅々として衣河に枝を聳かし、或ものは恋々として、高館に梢を伏せたのが、彫像の如くに視めらるる。  
その高館の址をば静にめぐつて、北上川の水は、はるばる、瀬もなく、音もなく、雲の涯さえ見え、ただ（はるばる）と言うように流るるのである。

「この奥に義経公。」

車夫の言葉に、私は一度俵を下りた。

帰途は——今度は高館を左に仰いで、津軽青森まで、遠く続くという、まばらに寂しい松並木の、旧街道を通つたのである。

松並木の心細さ。

途中で、都らしい女に逢つたら、私はもう一度車を飛ばりて、手も背もかしたであろう。  
——判官にあこがるる、静の霊を、幻に感じた。

「あれは、鮭かい。」

すれ違つて一人、澆刺たる大魚を提げて駈通つたものがある。

「鱒だ、——北上川で取れるがすよ。」

ああ、あの川を、はるばると——私は、はじめて一条長く細く水の糸を曳いて、魚の背とともに動く状を目に宿したのである。

「あれは、はあ、駅長様の許へ行くのかな。昨日も一尾上りました。その鱒は停車場前の小河屋で買ったがすよ。」

「料理屋かね。」

「旅籠屋だ。新築でがしてな、まんずこの辺では彼店だね。まだ、旦那、昨日はその上にはい鯉を一尾買入れたでなあ。」

「其処へ、つけておくれ、昼食に……」

——この旅籠屋は深切であつた。

「鱒がありますね。」

と心得たもので、

「照焼にして下さい。それから酒は罎詰のがあつたらもらいたい、なりたけいいのを。」

束髪に結った、丸ぼちやなのが、

「はいはい。」

と柔順すなおだっけ。

小用こようをたして帰ると、もの陰から、目を円まるくして、一大事そうに、

「あの、旦那様。」

「何だい。」

「照焼にせいという、お誂あつらえですがなあ。」

「ああ。」

「川鱒かわますは、塩をつけて焼いた方がおいしいで、そうしては不可いけないですかな。」

「ああ、結構だよ。」

やがて、膳に、その塩焼と、別に誂えた玉子焼、青菜のひたし。椀がついて、蓋を取る

と鰹汁こいしじくである。ああ、昨日のだ。これはしかし、活きたのを料りようられると困ると思つて、

わざと註文はしなかったものである。

口を溢こぼれそうに、なみなみと二合のお銚子ちようし。

いい心持こころもちの処ところへ、またお銚子が出た。

喜多八きたはちの懷中、これにきたなくもうしろを見せて、

「こいつは余計だつけ。」

「でも、あの、四合鑊しごうびん一本、よそから取つて上げましたので、なあ。」

私は膝を拍うつて、感謝した。

「よし、よし、有難ありがとう。」

香こうのものがついて、御飯をわざわざ炊たいてくれた。

これで、勘定が——道中記には肝心な処だ——二円八十銭……二人分です。

「帳場の、おかみさんに礼を言つて下さい。」

やがて停車場へ出ながら視みると、旅店はたごやの裏がすぐ水田みずたで、隣となりの地境じぎかい、行拔ゆきぬけの処

に、花壇があつて、牡丹が咲いた。竹の垣けも結ゆわなないが、遊あそんでいた小児こどもたちも、いたず

らはしないと見える。

ほかに、商屋あきないやに、茶店に、一軒ずつ、庭あり、背戸せどあれば牡丹がある。往來ゆききの途

中も、皆そうであつた。かつ溝川みぞがわにも、井戸端にも、傾いた軒、崩れた壁の小家こいえにさえ、

大抵たいてい皆、菖蒲あやめ、杜若かきつばたを植うえていた。

弁財天の御心みこころが、自ら土地にあらわれるのであろう。

忽たちまち、風暗く、柳なみが靡なびいた。

ステーション  
停車場へ入った時は、皆待合室にいくまいったほどである。風は雪を散らしそうに寒くなった。一千年のいにしえの古戦場の威力である。天には雲と雲と戦った。

# 青空文庫情報

底本：「鏡花短篇集」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年9月16日第1刷発行

2001（平成13）年2月5日第21刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十七卷」岩波書店

1942（昭和17）年10月初版発行

初出：「人間」

1921（大正10）年7月号

入力：門田裕志

校正：米田進、鈴木厚司

2003年3月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 七宝の柱

## 泉鏡花

2020年 7月17日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>